

名立の民話 『雁田さん』

昔、昔のこと。
今から三百年ほど前、折居に久左衛門が住んでおったとき。

春のあたたかい日、久左衛門は家の前の畑を耕しておった。

「春の土は固くてクワで掘り起こすっちゃ大変だ。腰が痛あなつたわい」

ぶつぶつ独り言をいいながらクワで“よいしょ、よいしょ”と畑を打っていると“こつん”とクワに触れる物があつたとき。

久左衛門は「なんだろう」と思って掘り起こしてみると陰陽（男根・女陰）の形をした石が二つ出て来たとき。

「こりゃ、珍しい形をしてる。みればみる程そっくりじゃ」

久左衛門は“うふふ”と笑って家の前に“見世物”のように置いたとき。

道を通る人は「ありゃなんじゃ」といって立ち止まって二つの石をしみじみ見ている

“くすつ”と笑っては通りすぎて行き、やがて“久左衛門さんの家の前におもしろい石があるぞ”と評判になりわざわざ見にやって来る人が絶えんようになった。

久左衛門が畑から石を掘り出してまもなく、家の者が次々と病気になる、寝込む者も出てきて久左衛門のおつ母さが、

「家の者が次々、病気になるんはあの石のたたりかも知れん。元の場所に埋め戻さんならん」といって早速畑へ埋めたとき。

すると不思議なことに家の者の病気は“ピタリ”となおり、またいつも通りの元気のいい家族になって仲良う暮らした。石の騒動から八年ほど経ったある夜、久左衛門の子、太助が夢をみたとき。

夢の中に尊いお姿の貴人が二人現れて、

「われらはかつて一度掘り出されたが、粗末に扱われ地に埋められた。再びこの世に出ようと思う。われらをまつれ。産霊、縁結びの願いもろもろの祈願かなえよう」

と厳かにいったところで“はっ”と目が覚めた。

この夢、三日三晩続き、太助が畑に行つてみると、陰陽の形の石が掘り出されてあつたとき。

「これは夢にみた尊いお姿の貴人が石に姿を変えられたということが」

太助はていねいに、二つの石を洗って小さなお堂に祀つたとき。

この夢の話が村中にもちろん、遠くの村にも伝わり、子宝に恵まれない人や、腰から下の病に悩む人たちがやって来て、手を合わせると思議と願いがかない、大勢の人でそれはにぎわつたとき。

文政二年、年々増える参拝者に太助の孫、久兵衛が新しく神社を建て“雁田社”としたそう。

この雁田さん、豊験あらたかといわれ、祈願成就の御礼の提灯やのぼりがたくさん奉納され、今も地元の人にはもちろん、遠くからお参りに来る人でにぎわっているそう。

